

保育士養成カリキュラムにおける公民館連携学生ボランティア活動プラン

山中 文・石橋 由美

教育学

Students' Volunteer Work Plan for a Public Hall in Child Care Training Curriculum

Aya YAMANAKA Yumi ISHIBASHI

(2004年11月10日受理)

2002年の中央教育審議会答申では、学生ボランティア活動やインターンシップを大学カリキュラムにとりあげることが提言され、それにあわせて、各大学では学生ボランティア支援の活動がすすめられている。本学においては、地域社会と専門職現場・大学が融合的に関わりあって、地域全体をひとつの総合的な「まなびの場」にしていこうとする「あしんキャンパスシティ」構想が公表され、幼児教育学科では、その趣旨から、公民館における学生ボランティア活動を展開しはじめた。

本稿では、本学における学生ボランティア活動が、中央審議会答申における「幅広い教養教育」の枠だけでなく、専門職としての実践研究に貢献し得る可能性があることを事例から紹介し、今後のカリキュラム化への見通しを検討した。

1. 大学における学生ボランティア活動支援の動き

(1) 答申に基づく各大学の動き

2002年2月21日、中央教育審議会は、「新しい時代における教養教育の在り方について」を答申した。答申では、変化の激しい現代に求められる教養教育の検討の中で、大学カリキュラム外における教養教育が強調され、その新しい教養教育のひとつとして、国内外でのボランティア活動、インターンシップなどの職業体験がピックアップされた。そして、その具体的方策のひとつとして、社会貢献活動やボランティア活動をカリキュラムに取り入れること、長時間のインターンシップを実施することなどの柔軟な履修制度の整備が奨励された¹⁾。

そしてまた、同年7月29日には、同審議会におい

て、「青少年の奉仕活動・体験活動の推進対策について」が答申された。ここでは、さらに、高等教育機関における学生に対する奨励・支援がさらに具体的に提示された。たとえば、正規的教育活動として、ボランティア講座、サービスマーケティング、NPOに関する専門科目等を開設すること、そして、インターンシップを含めた学生の自主的ボランティア活動等の単位認定を検討することが求められ、大学ボランティアセンターの開設や学生サポート体制の充実、ボランティア休学制度など、学生がボランティア活動を行いやすい環境整備と情報・機会の提供を行っていくことが提示されている²⁾。

このような答申を背景に、各大学では、ここ数年学生ボランティア活動推進の動きが活発化した。明治学院大学では、2003年度の「特色ある大学教育支援プログラム」(文部科学省)として、「大学教育における社会参画体験の取込と実践～ボランティ

アセンターによる教育支援の試み〜」が採択されている³⁾。これは、自らの体験に基づいた自主的な思考・行動を学生自身から引き出すためのボランティア活動を中心とした教育プログラムであり、大学が全学的な支援体制でサポートするものである。この他にも、ボランティア活動を支援するシステム整備は各大学でさまざまにすすめられている⁴⁾。

(2) 初等教育関連現場と大学提携の動き

前掲の2月答申ではまた、幼・少年期における教養教育の在り方の具体的方策として、地域社会における子どもの居場所づくりの推進、基礎学力の徹底のためのきめ細やかな指導の充実をあげている。その中で、地域の子ども支援のひとつとしてのボランティアの協力や、各学校におけるティーチングアシスタントとしての社会人や大学生の活用が提言されている。

この答申を受けて、文部科学省では、奉仕活動・体験活動の推進に関する施策として、2004年度には、「地域と学校が連携協力した奉仕活動・体験活動推進事業」「地域子ども教室推進事業」「インターンシップ総合推進事業」などが予算化された⁵⁾。

このような動きから、大学における学生ボランティア活動支援の一環として、上にあげた幅広いボランティア活動システムとは別に、学校教育現場と提携した学生ボランティア活動システムをたちあげているところもある。

たとえば、京都大学における「[学生ボランティア]学校サポート事業」では、京都大学が京都府教育委員会と事業協定を結んで、学生自身の資質向上をめざしながら、市立学校・幼稚園に学校・園が必要とする教育活動の支援を行う学生ボランティア活動システムを構築している。

(3) 本学幼児教育学科における公民館連携学生ボランティア活動支援の動き

上記のような国内の動きを背景に、現在、本学幼児教育学科においても、新見市教育委員会と連携して、公民館を中心とした学生ボランティア活動支援のシステム整備がすすみつつある。この動きは、以下に述べるように、2003年度の本学主催公

開シンポジウム（テーマ「阿新地域と新見公立短期大学の将来像」）を検討する経緯から誕生した。

新見公立短期大学は、2003年10月19日、上記の公開シンポジウムを開催した。内容は、岡山県の阿新地域内外のパネリストによる発表を中心として、地域とともに発展する本学の発展像を探るものであった。本学からは、「あしんキャンパス・シティ構想」が発信された。これは、地域社会と専門職現場と大学間で、人も情報も融合的に流通し、地域全体が総合的な「学びのまち」システムとなる構想である。シンポジウムでは、フロアからの意見も充実して盛会に終わった。また、アンケート結果からは、本学に期待することについて、自由記述回答として、「あしんキャンパスシティ構想」を中心として地域貢献に触れた記述、本学四大化に向けた記述、また、大学に地域への情報発信をのぞむ記述などが多く得られた⁶⁾。

シンポジウム終了後、幼児教育学科では、シンポジウム講演内容とシンポジウム参加者のアンケートを元に、具体的な検討に入った。そして、本学四大化については、大学全体の将来構想として検討していく課題であることを確認する一方で、現段階でなし得る地域貢献と情報発信について具体案を提案していくことになった。その具体案のひとつとして浮かび上がったのが、新見市教育委員会生涯学習課とタイアップした学生のボランティア活動支援プランである。

一方、本学では学生サークル活動としてボランティア部が地道な活動を続けており、また、部所属の学生に限らず様々な学生が、これまでも、新見市千屋地区の震災ボランティア活動や、福祉施設・図書館・公民館におけるボランティア活動などを数々行っている。これらの活動は地域貢献度も学生に対する教育効果も高いと推察できるが、個別単位の活動であり、その情報は必ずしも共有・発信されているとはいえない。

今回の学生ボランティア活動支援プランは、このようなボランティア活動を基盤として、さらに学内自己点検・地域貢献・情報発信の点から、その活動状況を集約し、活動情報の発信をしようとするものである。この活動では、同時に、「あしんキャンパスシティ構想」にのっとった阿新地域支

援の点から学生ボランティアによる地域貢献と、対人援助専門職育成をになう本学の教育における学生ボランティアの教育効果が期待できる。

2. 公民館連携学生ボランティア活動支援の実際

(1) 公民館連携学生ボランティア活動支援経過

筆者らは、幼児教育学科将来構想担当者として、また学内における将来構想委員として、上記の経緯ではじまった学生ボランティア活動支援プランを以下のようにすすめてきた。

2003年12月18日

新見市教育委員会生涯学習課と打ち合わせ。以下の内容がまとまった。

- ・ 本学と生涯学習課の間で、学生ボランティア活動に関する情報交換提携
- ・ 本学に近い新見市西方公民館、同高尾公民館との連携の示唆

2003年12月～3月

新見市西方公民館、高尾公民館を、以下の目的で訪問した。

- ・ 幼児教育学科の学生ボランティアに対する基本姿勢の説明
- ・ これからの連携についての打ち合わせ

2004年3月11日

新見市体験活動ボランティアセンターに、以下の経緯で、幼児教育学科の学生ボランティア活動を紹介した（新見市生涯学習課より筆者に依頼）。

- ・ 幼児教育学科で検討し、本学の学生ボランティア活動が本学学生全体にわたって行われていた経緯から、全学的な取り組みを紹介することを将来構想委員会に提案
- ・ その趣旨から暫定的に山中がボランティア窓口となり、全学のボランティア活動展開の様子を紹介する記事を執筆

2004年5月19日

西方公民館より、西方幼児クラブにおける学生ボランティア活動が依頼された。

また、高尾公民館で、先にあげた文部科学省の施策による「地域子ども教室」が開かれることになり、それに対する本学の学生ボランティアへの依頼が提示された。

2004年5月

幼児教育学科における学内小演奏会(プティコンサート)で、学外の見学者参加をオープンにしているひとつの試みとして、新見市幼児クラブに案内を呼びかけることを、学科で決議した。

2004年6月

前掲新見市体験活動ボランティアセンターだよりで、本学学生ボランティア活動の紹介記事が掲載された。

2004年7月11日

西方幼児クラブ活動を、本学学生会館ホールにおいて本幼児教育学科学生ボランティアプランにより企画実施した。(新見放送により放映、この企画詳細については後述)

2004年7月14日

高尾公民館館長より高尾小学校1、2年生を対象とした「地域子ども教室」支援協力要請があった。本年度2回分の「地域子ども教室」の学生ボランティアによる企画実施が依頼された。

2004年10月4日

高尾公民館「地域子ども教室」第一回学生ボランティア企画「短大のおねえさん、おにいさんと遊ぼう」の以下の内容で実施した。(新見放送放映、備北民放取材)

- ・ 高尾小学校1、2年生児童31名対象。同小から引率教員3名
- ・ 本学幼児教育学科学生5名、参加教員3名
- ・ 10月4日15:30～16:20の時間設定
- ・ 手遊び、絵描き歌遊び、学習ゲーム

2004年11月1日

高尾公民館「地域子ども教室」第二回学生ボランティア企画「短大のおねえさん、おにいさんと遊ぼう」を、以下のように実施した。

- ・ 高尾小学校1、2年生児童31名対象。同小から引率教員3名
- ・ 本学幼児教育学科学生9名、参加教員3名
- ・ 11月1日15:00～15:40の時間設定
- ・ 手遊び、カズーブくりを中心とした表現遊び

2004年11月28日

第二回西方幼児クラブ活動・学生企画実施

(2) 西方幼児クラブ活動における第一回学生企

画と実施の実際

前掲したように、2004年7月11日に、公民館連携学生ボランティア支援としての初めての活動として、西方幼児クラブ活動が行われた。これは、西方幼児クラブが年数回行っている活動の一回分の活動（約2時間）を幼児教育学科学生が企画実施するように依頼されたものである。その時期、幼児教育学科2年生は保育実習中であったので、1年生にボランティア情報を伝え、また学内小演奏会（プティコンサート）に出演した学生を中心に企画構成をもちかけた。その結果、企画する活動全体に加わる学生23名、個々の子どもたちへの補助として参加する学生が3名の申し出があった。この学生数は、幼児教育学科1年生総数53名の約半数にあたり、志望する専門職の対象となる幼児に対する学習意欲・関心が高いことがうかがえる。活動は2時間にわたるので、活動プログラムに対しては相応の勉強と準備が必要であることから、筆者らの指導助言も交えて、プログラムを構成した。

以下に、活動概要と活動内容の柱立てを掲載する。

活動日時：2004年7月11日（日）1000-1200

活動場所：新見公立短期大学学生会館2Fホール

参加者：新見市西方幼児クラブ参加者32名

（0-3才会員と兄弟姉妹、保護者を含む）

西方公民館館長

本学幼児教育学科学生26名

本学教員2名

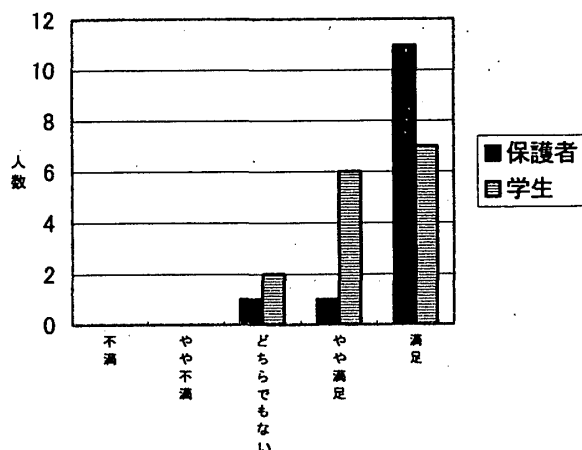
活動内容：

- ①紙芝居『ひもかとおもったら』（ライト電子製版）
- ②手遊び『一週間』（学生編集）
- ③新聞紙遊び（新聞紙を折ったり破ったりして形を変え、お話をつくっていく遊び）
- ④パネルシアター（『森のくまさん』『かくれんぼ』パネルは学生製作）
- ⑤自由遊び（ホール内のおもちゃ、本、楽器に自由に触れ、学生と関わって遊ぶ）
- ⑥合奏鑑賞『フックト・オン・クラシック』（有名なクラシックの楽曲フレーズをいくつもつなげている器楽曲、一部学生編集）

(3) 西方幼児クラブ活動における第一回学生企画の事後調査

先の第一回企画では、事後、学生、参加保護者に対して簡単な調査を行った。

その調査によれば、活動の全体的な評価としては、次のグラフのような結果であった。



学生は、後述するような自分たち自身への反省からか、満足したとする学生が7人（27%）であったが、回答した保護者は、11人（84.6%）が満足したと答えている。

①保護者の意見

活動に対する保護者の意見としては、以下のようない記述がみられた。

まず、歌や演奏、楽器など日頃見聞きしない活動や、簡単にできる思いがけない遊び提示を楽しめたとする感想が特徴的であり、学生と遊ぶ子どもたちの様子を喜ぶ感想もみられた。一例としては、以下のようなものがある。「子どもにとって歌や演奏などに親しむ機会が少ないので、こういう機会があって良かったと思います。子どもが人見知りでなかなか慣れなかったんですが、根気強く子どもに関わって頂いてとても嬉しく思います。新聞紙を使って家でもしてみようと思います。親切に教えて頂いてありがとうございました。」

また、一方で進行、内容に関する提案や指摘（「パネルシアターをもっと増やしたらどうか」、「子

どもたちが中心で遊ぶ企画も欲しい」等)があった。

保護者の短大に対する希望を問うた回答では、このような機会の広がり期待する意見が大多数であった。一例として、「地域に密着して、こういう機会が増えると嬉しいと思います。素晴らしい先生方になれるのを楽しみにしています。」「すぐ近くであって、保育園の実習の時などではお世話になっていますが、日頃なかなか交流がないので、こういった地域行事や子供達と遊んだりする会への参加の機会が増えれば、子供達ももっと喜ぶと思います。地域の人たちは短大生と交流することを楽しみにしていると思うので、これからもこういう機会があれば参加したいと思います。」などがあげられる。

②学生の意見

学生に対しては、参加の動機、活動について、本学への希望の三点を自由記述してもらった。

学生の参加動機は、子どもと触れ合うことが自分にとってもよい勉強になると思った、という動機が大多数であったが、活動を終えてみると、その活動に対して、動機にあげた「よい勉強」の中身が具体的に見えた記述が多数みられる。表1の下線を引いた文章がそれである。活動内容に対する反省(例:子どもたちの立場にたって活動内容を決めるべきだった)や、指導技術(例:どうすればもっと多くの子どもたちが一緒に取り組んでくれるか)、子どもの興味関心の発見(例:音が出るものに興味があることがわかった)など、まだ、実習を経験していない学生がこの機会を通してさまざまな思考をめぐらせていることがわかる。

学生リーダーに対してはさらに活動ごとに記述してもらったので、その他の学生よりもさらに具体的な活動反省と代案提示がみられる(表2参照)。主に下線を引いて示したが、「ないものを想像するのは難しそうだったので、消防車の絵などを用意してやるとよかったかもしれない」などは、その代表的な例である。活動の準備段階から各活動の具体的な反省、活動環境についての反省など、多岐にわたって、学生自身の発見がみられ、既習事項との照らし合わせをしたり、今後の学習課題を自ら設定したりしている様子が窺える。

表1 学生反省

本日の活動について
①もう少し遊び道具があったらよいと思った。でも、みんな楽しそうだったので良かった。私も本当に楽しかったです。元気をもらいました。
②思ったより、子どもの人数が少なくて、あまり一緒に遊べなくて残念だった。次回はもっと積極的に子どもと接していきたい。
③もっと子どもたちの立場になって、活動内容を決めていくべきだった。
④短大生になって初めてのボランティア活動に参加し、子どもに対してどう話しかけたらよいかわからず、戸惑いました。私は手遊びをやったのですが、前に立ってやるだけではなく、もっと一緒にやってくれる子どもの側に行き行ってあげたらよかったと思いました。当日のプログラムを充分理解していない部分があり、出し物と出し物の間がスムーズにいらっていると、もっと子供達と遊ぶ時間が増えたのではないかと思います。とても楽しかったです。
⑤全部が完璧にできたとはいえないけど、子どもたちが楽しんでくれていたので、良かったなと思う。
⑥最初はどのように子供達とコミュニケーションをとればよいか分からなかった。だけど、時間がたつにつれてだんだん慣れてきた。また機会があれば、このような活動に参加していきたい、勉強したいと思う。
⑦最初は緊張気味な子供達も、時間が経つにつれて、私達学生に慣れてくれる子たちが出てきたのでよかった。
⑧子どもたちはとてもかわいくて、反応もよくて、すごく楽しかったです。もう少し、子ども達の遊べる物があれば良かったなと思いました。子どもたちはたいてい音が出る物にすごく興味があることが分かりました。
⑨お母さん方の視線が少し気になって、あまり子どもに話しかけれなかった。手遊びが少し速すぎた。子どもたちがとてもなついてくれたのでうれしかった。
⑩楽しかった。
⑪一緒にやってくれる子ども達が少なかったので、少し悲しかった。どうすれば、もっと多くの子ども達が一緒に取り組んでくれるか考えたい。
⑫子どもの数より、ボランティア学生の方が多くて、少しやりにくいように思った。でも逆に、学生同士の間の仲が深まった。手遊びをたくさん覚えておけば、場を盛り上げたり、つないだりできると知った。
⑬パフォーマンスも充実していて、意義ある活動でした。
⑭もう少しスムーズに運営できたらよかったと思う。プログラムの間があきすぎていた。周りの壁などに飾りつけがあるともっとよかったと思う。
⑮久々にたくさん子ども達と触れ合うことができて、楽しかったし、接し方などとてもよい勉強になった。

表2 リーダー学生レポート

1.準備	もう少し早い時期から取り組む必要があったと思う。そうすれば周りの飾りつけなどもきれいにできたと思う。もっと先生と内容について、前もって話し合っておきたかった。
2.当日	
紙芝居	半田さんは声が大きく、せりふはほとんどアドリブで、子どもの声も取り入れながらやってよかった。(『ひもかと思ったら』ライト電子版)
手遊び	歌はもっと大きな声で歌うとよかった。手のふりがあつていなかった。
新聞紙	声が後ろの方まで聞こえないときがあった。ないものを想像するのは難しそうだったので、消防車の絵などを用意してやるよとよかったかもしれない。新聞紙を、色模造紙にしてもよかったかもしれない。
パネルシアター	結構、好評だったと思う。「かくれんぼ」もやってよかったのではと思った。
フック・オン・クラシック	子どもの中に泣く子がでるかなと思ったけど、みんなが楽しい物を見るように見ていた。あまり楽器に触れる機会がないのだと思った。今後楽器を作ったりする交流ができるよと思う。
3.子どもについて	最初は頼のそばを離れようとしなかったが、徐々に遊んでくれるようになったので嬉しかった。一人の女兒は舞台にかけのぼり、サッカー少年も舞台の上で遊んでいた。そういえば私も小さい頃は舞台の上とかが好きだった気がします(他人に見られるとかじゃなく、登るということが)。少し調べてみたいです。3歳の男児はボールを入れて遊ぶゲームをしようとしたのだが、なかなか入れることができず、「こんな遊びはこどもはぜんどの一で!」と文句を言っていました。これも何か成長過程の一つではないのかなと思いました。子どもと遊んでいるときに、ほかにたくさん気づくと、「あ!これだ」と思うことがありました。今までのボランティア活動は、子どもに見せてあげるものばかりで、実際に交流する遊びはあまりなかった。今後は、学生と一緒に遊ぶ時間も増やしていきたいと思う。あと、楽器をととても興味深そうにさわっていた。音が出る物も大好きようだ。遊びなどよりも数倍楽しそうでした。これからほんとに体験型活動にしていきたいと思います。(一部省略)
4.学生について	今回初めてボランティアに参加した人もいて、本当にとまどっていた。始めの方は何と声をかけていいのかも分からない様子で、こういうときはどう対応したらいいんだとかを思い出しながら、必死に話しているようであった。もっと経験を重ねる必要があると思う。でも、楽しかったという声が多かったのよかった。
5.流れ	あまりよかったとは言えない。出し物の間があきすぎていたし、なにかテンポよさがなかったと思う。みんなが流れ、感じを把握できていなかったからだと思う。もっと量感も必要だし、パフォーマンスのテクニックが必要である。
6.まとめ	今までで一番大変であった。各出し物のグループと打ち合わせなどする暇もなく、どたばたしていた。けれど今までで一番大きいスケールであった。学ぶこともたくさんあった。まだまだ改善すべきところばかりである。保護者の方が車を置く場所に困っておられた。もっと気配りしないといけないと思った。保護者の意見・感想、学生の意見・感想を読んで参考にしたいと思う。(一部省略)

3. 保育士養成カリキュラムにおける公民館連携学生ボランティア活動

以上、一例であるが、公民館連携ボランティア活動を体験した学生の事後記述から、学習のふりかえり、教材の選択・内容構成・指導技術・環境構成の多岐にわたる発見分析と今後の学習課題の自己設定がなされている状況を紹介した。この活動は、上記の保護者の回答からもわかるように、地域貢献、情報発信にももちろん寄与するものであるが、学生のこのような状況は、今後の保育士養成カリキュラムにおける新しいプログラムの可能性を予測させる。

矢藤誠慈郎らは、保育者養成における関係論的な学びの論理の有効性を以下のように述べている。「目の前の事象を解釈する枠組みと、そうした経験と理論との間を橋渡しする、つまり演繹したり帰納したりする方法を身につけさせることが重要である。単にテキストの内容を伝達するのではなく、さまざまな情報を知的に処理する方法を身につけさせ、実習経験を実質的な学びに変換することができるような思考の実践力を養うことを企図しなければならない」⁷⁾

公民館連携ボランティア活動は、少子化により子どもに実際に触れることの少ない学生が、さまざまな角度から子どもたちを理解する貴重な体験の場である。学生たちは、子どもたちを対象に遊びを具体化していく、といく点から実践力への視野と、既習理論や学習課題へのアンテナを得ることになる。このようなボランティア活動は、体験と学習理論との関係を構築する手がかりとなる活動として位置づけられよう。

先に示した中教審答申による各大学のボランティア活動全体の動きや、初等教育現場における大学提携の動きは、学生の人間的視野のみならず、専門職養成機関における教育効果という点で、具体的なカリキュラム上の措置が早急に必要になってくると考えられる。

おわりに

以上、本学における公民館連携学生ボランティ

ア活動プランを中心に、その紹介と教育効果を述べたが、現時点では、まだ本学ではさまざまな制約や課題がある。

ひとつは、現行の授業時間との調整である。本学の幼児教育学科カリキュラムはきわめて過密であり、1、2年生通じて、ほぼ毎日1時限から4時限（あるいは5時限）まで授業を受講している。そのため、公民館から平日に要請を受けても、学生が活動できる日はごく少ない。また、時間割上空いている箇所でも活動を入れても、後日その時間帯に補講が組まれることがあり、その場合授業が優先であるという制約がある。

また、同じく時間割上の制約から、2年生より1年生の方が若干活動に参加しやすい。しかし、1年生はまだ学習期間が短いこともあって、たとえば2時間の幼児との活動設定などを学生自身で組むことは非常に困難である。そのため、教員の指導が入ることになるが、その関与の方法、カリキュラム上の位置づけ等はまだ模索中である。

大学内の問題として、現在の公民館連携学生ボランティア活動プランは、幼児教育学科学生が主体であるが、先述したように、本学には、他にもさまざまなボランティア活動が現在進行中である。中教審答申にみられるようなボランティアセンターの設置提言や、阿新キャンパスシティ構想における地域との連携・情報発信等を踏まえて、本学でボランティア活動をどのようにシステム化していくかということが、今後の課題となる。

注

- 1) 2002年2月21日中央教育審議会答申「新しい時代における教養教育の在り方について」
- 2) 2002年7月29日中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策について」
- 3) 文部科学省、『特色ある大学教育支援プログラム事例集』pp.382-386、2003
- 4) たとえば、次のような例がみられる。
 - ・北海道大学：「学生ボランティア活動相談室」を設置
 - ・ファリス女学院大学：「ボランティアセンター」を設置
 - ・関西学院大学：「国連ボランティア計画」と協定
- 5) これらの事業の内容については、文部科学省ホームページの「奉仕活動・体験活動情報の窓口」に掲載されている。(2004年9月9日アクセス)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/main13_a1.htm
- 6) この公開シンポジウムについては、すでに本学で冊子にまとめられている。
- 7) 矢藤誠慈郎、岡本和子、光本弥生、「保育者養成の再検討Ⅰ－実習を学びとして成立させるための学内指導の研究(1)－」『教育学研究紀要』第43巻第一部、pp.379-384、中国四国教育学会編 1997

*本稿は、山中、石橋による討議を踏まえ、全体の執筆を山中、2の調査結果のデータ処理を石橋が担当した。

Summary

In the Central Education Council Report in 2002, it was proposed to take up the student volunteer work and the internship in university curricula. Activities to support students' volunteer are encouraged at each university. At our college, "Ashin Campus City" plan was made public. This is a plan by which the community, professional workplaces and college are united, and adjust the entire region to one overall "Scene of learning." The Early Childhood Education Department in our college started students' volunteer work in a public hall for that purpose.

In this text, we verified that the students' volunteer work is not only worthy as the human nature promotion but also accomplishes the contribution to the community, and that it is useful for the practice research as professionals.